

「在外研究にはデメリットが多い」、そう周囲が囁く中、筆者は2012年9月末より日本学術振興会特別研究員の制度により米国ハーバード大学で海外ポストドクとなった。確かに米国に来てからの3か月間は言語・生活・研究環境に馴染むのに精一杯で、まともにも研究ができなかった。しかし今改めて感じるのは、さまざまな分野・技術・言語・文化を効率よく学ぶ上で海外有名大学での経験は有効であり、決してデメリットばかりではなかったということである。この点は特に強調したい。

筆者は半年ほど前、大阪大学の大学院生に自分の研究について米国での経験等を踏まえて発表する場をいただいた。このときコーディネーターの先生から「ハーバード大の博士課程学生たちにアンケートをとって、その回答を院生の皆に紹介して刺激してほしい」とのご指示を受け、それに合わせて用意したものを、ここでも公開させていただく。さまざまな国籍の学生に質問したところ、皆それぞれの立場から真摯に回答してくれた。学生の読者にとっては今後の進路の参考になれば幸いである。

質問1 なぜ博士号をとると決めたのですか？

サイエンスが好きだから。人類の科学の発展に貢献したいから（韓国・男性、台湾・男性、中国・男性）/最先端の研究やそのプロセスが面白いと思うようになったから（台湾・男性、カナダ・男性、米国・女性）/研究者に限らず米国では博士号がないと上職に就けないから。博士号をもっていたほうが多様な仕事に就ける可能性が増えるから（米国・男性、ロシア・女性）

感想：想像通りの回答が返ってきた。日本でも米国ほど博士号に権威があれば嬉しいと感じる。

質問2 なぜ米国（ハーバード大学）を選んだのですか？

応用工学分野が強くなりつつあるから（米国・女性）/研究資源が膨大だから。でも最近日本もすごいことに気付いた（中国・男性、韓国・男性、香港・男性）/米国で自分の実力を試すため（カナダ・男性）/自国で必要な経歴・キャリアパスだから（韓国・男性）/米国の人間関係は他国に比べてもより対等で、独立した学生が成長しやすいので

（米国・男性）

感想：日本との大きな違いは学生と教授の関係である。もちろんさまざまなパターンはあるが、日本を含むアジア圏ではトップダウンが一般的だと思う。

質問3 博士号をとったあとはどうするのですか？

結果が出ればアカデミア、だめなら企業か国の研究機関。国の研究機関は研究費の申請にそれほど悩まず研究に打ち込めることが魅力的（米国・男性、韓国・男性、台湾・男性、ミャンマー・男性）/企業か国の研究機関で研究員（米国・女性、ロシア・女性）/ベル研究所のような多くのタレント研究員が集まる研究所。でも最近はそのほどのレベルの研究機関がないように感じる（韓国・男性）/ポストドク。ただしこれまでやってきた分野とはなるべく関係のない新しい領域に挑戦し、自己研鑽したい（カナダ・男性）/インテルに就職が決まっているが、短期間で世の中に影響を与えることが目標（台湾、男性）

感想：こちららも国を問わず答えは同じである。米国アカデミアの競争は日本以上に激しいと感じる。

質問4 日本の学生にコメントがあればどうぞ

留学のメリットは自分の殻を破ることができるということだ。われわれは「文化の違い」を教科書で学ぶことはできても、自身で自己の領域から飛び出さないとそれを真に実感することはできない。これをじかに目の当たりにすることで、すべての国が異なる社会的尺度をもち、すべての国で常に共有できる常識がほとんどないことを痛感した。米国で勉強するもう一つの大きなメリットとして、そのまま米国で就職できる可能性が挙げられる。米国での経験がなくとも米国企業に就職できる可能性はあるが、かなり稀なことだと思う。重要な技術的革新を多く起こしている米国企業で働ける可能性が増すことは、その後のキャリアを考える上でとても魅力的である。デメリットは、博士課程が苦しいのと同じように、やはり海外留学も苦しい部分がある。その多くは言語の問題で、こちらに来た初年度は70%くらいしか授業内容が理解できなかった。今でもまだ100%ではなく、非常に疲れる。はっきりいって、自国に留まった優秀な友人のほうが自分より多く論

文を書いており、しっかり研究できているように感じる。外国人として米国が完全に心地よく感じることはまずないと思う（韓国・男性）/日本人学生は日本の科学技術が優れていることをわかっており、研究の経験も豊富。ただ一つの問題は、英語でのコミュニケーションがうまくないことだと思う。米国に行きたいと思っている学生は、日本にいる間に日常・研究関連の英会話をよく練習しておくべき（米国・女性）/学位取得・交換留学において海外経験をもつことは日本人学生にとってプラスである。これを通じて他国での研究の進め方、アカデミアの動向を知ることができる。同時に米国人にもっと日本人について正しく理解してもらえる（中国・男性）/日本で学位を取るのには米国で取るのと同じくらい有意義（ミャンマー・男性）/ただ仕事での成功とは何かを考えるだけでなく、何をすれば自分自身ももっと楽しめるかを考えるべきだと思う。日本人学生と接したときによく感じるのだが、自分たちが本当にそれで良いのかをよく考えずに上司（もしくは教授）の言うことにただ従っているように見える。上司の言うことを聞き、その指導に従って学ぶことは間違いなく重要なことだが、自分自身がより内省的であるべきだと思う。博士課程で考えるなら、そのテーマで研究を進めることにに対して本当に自分が幸せだと思っているのか、よく考えるべきだ。博士課程はいうまでもなく長いし、やるからには後悔してほしくないと思う。このような考える姿勢は大きな成功のための必要条件だと思う（カナダ・男性）/日本も研究分野で世界を引っ張る国のひとつだと思う。だから、日本人にとって米国に留学する面白みというのは、他の国からやってきた人々、つまり多様性と出会うことだと思う。それは研究だけでなく人生の視野も大きく広げることになると思う。違う分野から来た学生は研究への取り組み方が違うから驚く。例えばアジア人の学生は研究に対して堅実・地道である場合が多いが、米国人は自分の専門とは違うことに挑戦する傾向が強い。これは国家間における大学入学までの義務教育の違いを反映していると考えられるが、最終的には研究スタイルの差は自分がどの国の出身であるかというより、自分自身の個性に強く依存していると感じる（台湾・男性）

感想：渡航するからには当然さまざまな覚悟が必要だが、多くの学生は海外経験をなにごしか前向きに捉えている。東工大名誉教授の末松先生にもご助言をいただいたが、日本人は日本や日本人の良さ・強みを伝えるつもりで渡航するのがよいと感じる。

今回質問した学生たちと同様、私自身がハーバード大でのポストドク経験を通じて得た物質面・精神面での知見についてまとめて総括としたい。ハーバード大では、まず物質面ではOBの寄付金・基金をベースとした資金が潤沢で、クリーンルーム内には最新のプロセス装置が所狭しと並んでいる。これらは多くの技官により集中管理され、使用するには予約制の講義や簡便な試験などを通じてアクセス権を得る必要があるが、装置トラブルの対応に悩まされることなく、より純粋に研究に打ち込むことができる（もちろんトラブル対応も大事な経験だが）。また外部からの講演が非常に多いのも魅力的で、毎週何かしらの分野のトップの講演を自由に聴講できる（しかもコーヒーやピザなどの飲食物も毎回提供され、それらを頬張りながら聞くという日本ではあまり考えられない贅沢なものである）。思わぬところで関連分野の教授と握手できることもあり、人脈形成にはもってこいである。

精神面では学生らの思うところと共通することが多い。米国では学生が教授に比較的どんだんものを言えるし、逆に、言えないと「アイデアやモチベーションに乏しい学生」として評価を徐々に落とすことになる。評価が下がれば、他の研究者との共同研究の機会を逸することになる。最悪の場合、フェローシップがあっても他のグループに移ることを勧められる。ポストドクの場合はもちろんこれらの荷重が増す。良くも悪くもアイデアが求められる土壌では、独立した人物が育まれる。一方、日本の学生は全体スケジュールに従順であるのに対し、米国ではグループミーティングなどを個々の都合ですっぽかす人も多い。つまり、良くも悪くも興味の有無と行動が一致している人が多い。独立心と協調心、その両者のバランスが取れた学生を育てるのが現時点での日本の大学教育の使命なのでは、と個人的に感じている。

（ハーバード大学 北 翔太）